

ベートーヴェン／交響曲第2番ニ長調 Op.36

「交響曲第2番」が作曲された1802年は、ルートヴィヒ・ファン・ベートーヴェン(1770-1827)が通称「ハイリゲンシュタットの遺書」を書いた年でもある。難聴の苦悩と絶望を乗り越え、芸術に身を捧げる決心をしたこの手紙以降、ベートーヴェンは「傑作の森」(ベートーヴェン 研究でも著名なノーベル賞作家、ロマン・ロランの言葉)へと突き進んでいく。「交響曲第2番」は同年春から約半年にわたるハイリゲンシュタット滞在中に作曲された。初演は1803年、ウィーンで作曲者自身の指揮で行われた。

第1楽章：アダージョ・モルト～アレグロ・コン・ブリオ、ニ長調ソナタ形式。ニ長調の主音(レ)の強打で開始される堂々たる序奏は、転調が多くドラマ性に富んでいる。途中でニ短調になるところは「第9」交響曲の冒頭を予感させる。序奏で十分気分が高まったところで、快速な主部が開始される。第1主題をヴィオラとチェロによる弦の低音域で開始するのは、新奇な試みである。付点リズムによる軽快な第2主題は、木管とホルンで開始される。第2楽章：ラルゲット、イ長調 クラリネットとファゴットが弦と交互に主題を受け持つなど、木管楽器の用法に進展がみられる。第3楽章：スケルツォ アレグロ、ニ長調 ベートーヴェンは第2番で初めて「スケルツォ」楽章を置いた。第1番は「メヌエット」だった。スケルツォは同じ3拍子でもメヌエットよりはるかにテンポが速く、活気に満ちている。第4楽章：アレグロ・モルト、ニ長調 スケルツォの活気をそのまま受け継いだ、晴れやかな終楽章。ソナタ形式だが、再現部のあとにさらに展開があるなど、新たな手法の開拓がみられる。

遠山菜穂美

楽器編成 フルート 2、オーボエ 2、クラリネット 2、ファゴット 2、ホルン 2、トランペット 2、ティンパニ、弦五部 ※スコア上の表記

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。